

「2018年インドネシア大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学総合人間学部1年 (齊藤喬)

このインドネシア大学スプリングスクールでは、インドネシア語の授業や、アルンバやガムラン、バティックの文化体験、インドネシア大学の学生との共同発表を行った。インドネシア語の授業では、役に立つフレーズをたくさん教えてもらい、お店で買い物する時や現地学生と話をする時などに、簡単なインドネシア語を使うことができてとてもうれしかった。また、文化体験のガムランの授業では、ガムランにまつわる言い伝えや、人々がいかにこのガムランを大切にしているのかという話を聞いた。また、プログラム中に参加することができた日本との交流団体による囲碁セミナーでは、インドネシアの中学生に日本文化の1つである囲碁を教えるという体験をした。小さい時から囲碁のような日本の文化に触れる機会があるということはとても良いことであると思った。

私は、このプログラムで、インドネシア大学の学生とたくさん話をして、インドネシアの文化や考え方や習慣に触れることができた。実際に、インドネシア大学の学生から食事や宗教、政治、インドネシアの社会問題に関することなどたくさん話を聞き、インドネシアの文化や今の社会の状況を実際に自分の目で見ることができた。インドネシアはイスラム教徒が多い国であるため、ヒジャブをかぶっている女性が多いことやお祈りの時間になるとモスクに行く人がいることなど、日本とは大きく違うイスラム教の文化が存在していた。モスクに実際に行った時やお祈りをした時に、現地の学生がイスラム教の作法や考えなどを教えてくれ、どのように人々がイスラム教やそれに関する生活に向き合っているのかが分かった。日本では強く意識していなかった宗教という概念について新しい観点を自分の中で持つことができた。このように、人々が宗教や文化や社会についてどのように考えているのかを知ることができた。

また、インドネシアの社会について1番興味深かったことは、インドネシアの比較的貧しい人々がお金を得ている手段についてである。交差点で車を誘導して運転手からお金をもらったり、屋台でご飯を売ったり荷物を運んだりするという仕事など、日本ではほとんどみられない方法で自ら稼ぐ手段を見つけて働いている人が多かった。また、貧しいために物乞いをしている人もたくさんいた。そのような貧困層が、この社会でお金を稼いでいる様子が、非常に印象的であった。ジャカルタは非常に人口が多く、また、経済や労働などの様々な仕組みが整っていないところがあり、その様子が人々の生活の状態から見てとることができた。インドネシアはジャカルタを中心に非常に経済が成長している。これによって恩恵を受けている人ももちろんたくさんいるが、格差が生じてますます生活が苦しくなっている人もいる。その中で、人々は、貧しい人にお金をあげたり自分のために何かをしてくれた人に対してお金を渡したりするなど、互いに支えあって社会を維持していこうとしているように感じた。人々の生活の中でこのようなことが自然に行われていた。そのような今のインドネシアで、人々がどのように生活しているのかという普段あまり注目されないようなところを見ることができた。たくさんの電気がつけられて多くの人々が買い物しているモールのすぐ横で、物乞いをしている人がいるという非常に対照的な光景から、今の社会の現実が浮き彫りになっていた。このような社会の現実を自らの目で見ることができた。その現実を見て、このような社会のままに本当によいのか、他人ごととして考えることは出来ないと思った。

私たちはよく東南アジアの国を、「東南アジア」というようにひとくくりのグループにして考えがちであるが、国が違えば抱えている問題や魅力は違うと思う。人々がどのように考えてどのような行動をとっているのか、どのような生活をしているのかも異なるだろう。その人々の暮らしぶりを自分の目で見ることでとても興味深かった。そして、自分の目で見て話を聞き自分で考えることの大切さをこの2週間を通して強く感じた。社会の中での人々の生活について興味を持ったため、将来はこのようなトピックについて深めていきたいと思った。